

福島では「復興」が独り歩きしている

武藤類子

今福島では「復興」という言葉が独り歩きしています。莫大な復興予算が流れてきてさまざまな施設が建てられています。本当の意味で復興しているかというところ、そうではない。いまだに4万人くらいが避難者としてふるさとに帰れない。災害復興住宅に入ったり自分で家を建てたりすると、もう避難者としてカウントされません。公表されている避難者の減少が復興の目安になっているとはとても思えないですね。

避難区域がどんどん解除されていくわけですが、事故前に私たちが、そこまでは浴びても仕方がないとされていた年間1ミリシーベルトという放射線量が突然、福島の中では20ミリシーベルトになって、そこに人が帰されていく。そういう帰還政策です。

それと同時に賠償も打ち切られて、支援の時期が終わったという国家公務員住宅に事情があって住み続けている人たちに、家賃の2倍が「損害金」として請求されています。裁判に訴えられている人達もいます。弱い立場の被害者が切り捨てられている状態です。

突然に数値が変わったのは、放射能のゴミの問題もです。事故前の放射性セシウムのクリアランスレベルは1kgあたり100ベクレルでした。それが福島では8000ベクレルになって、それ以上のものを燃やす焼却炉が次々にできて、そこで利益を得ているのが原発の関連企業なんです。

除染事業というのも同じ構造です。その除染で出てきた土が、中間貯蔵施設にどんどん運びこまれています。

環境省は、その量を少なくしようと、汚染土の再利用をしようとしている。いろんな実証実験が県内各地で計画されましたが、地元の人々の反対にあって、実際に行われているのは飯館村です。農地に除染土を入れて覆土をする。最初は資源植物を植えると言っていたのが、いつの間にか野菜を植えることになっています。水田での使用や覆土なしでもと考えていることまでわかりました。そういうふうに、いつの間にか変わっていく。

飯館村には木質バイオマス発電所がつくられるんですね。県内に計5か所くらいできるんです。最初は、汚染が酷い木の皮は使わないと言っていました。それが、いつの間にか木の皮も燃やそうとなってしまうのです。飯館村の場合は、最初から汚染木を燃やして山林除染を兼ねるので一石二鳥みたいな言い方をしています。

それを受注している会社の株主に東電とその子会社が入っている。けっきょく加害者が利益を得る。何ということでしょうと愕然とします。

「東日本大震災・原子力災害伝承館」というのが9月に開館しました。立派な建物ができるんだけど、本当に伝えるべきことが伝えられていない。むしろ違うことを伝えようとしているんじゃないかって感じすらしますね。なんで事故が起きたのか、事故の責任はどこにあるのか、事故後の10年でどんなことが起きているのか、そういうものが全部ぬけ落ちている。

※「はんげんぱつ新聞」2012年1月号に掲載された武藤類子さんの記事の一部を了解のうえ転載